

## パウロの手紙

聖書の中に「手紙」があるというのは驚きです。

主要な宗教には教典があります。教典とは「基本的な教義が説かれている文書。特に創唱宗教では、創始者の言行が教典の中心をなすとされているので、教典はきわめて重視される、たとえばバラモン教のベーダ、仏教の諸経典類、キリスト教の聖書、イスラム教のコーランなどがある」（ブリタニカより）。

「パウロの名が付いている書簡が13あるが、研究によれば、そのうちの7書簡すなわちローマ、コリント第一、第二、ガラテヤ、フィリピ、テサロニケ第一、フィレモン」が実際にパウロが書いたものといわれている（岩波「キリスト教辞典」・元西南学院神学部教授、青野太潮より）。

二千年前の手紙を読めるということは驚きです。パウロは口述で手紙を出しました。『ローマの信徒への手紙』を筆記したのはテルティオでした（ローマ16：22）。ガラテヤ書では最後のところで「わたしは今こんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています」とあるように、パウロは眼がわるかったようです。このことを「わたしの身に一つのとげが与えられました。」と書いています（コリント第二、12：7～12）。

この眼病が癒されるように「わたしは三度主に願いました。すると主は、“わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ”と言われました」（コリント第二、12：8～9）。

なんと徹底したキリストの力にゆだねる信仰でしょう。 （山下誠也）